

気のいい火山弾

宮沢賢治

青空文庫

ある死火山のすそ野のかしはの木のかげに、「ベゴ」といふあだ名の大きな黒い石が、永いことじいつと座つてゐました。

「ベゴ」と云ふ名は、その辺の草の中にあちこち散らばつた、稜のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本たうの名前もあつたのでしたが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。

ベゴ石は、稜がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのばしたやうな形でした。そして、ななめに二本の石の帯のやうなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ぺんも怒つたことがないのでした。

それですから、深い霧がこめて、空も山も向ふの野原もなんにも見えず退くつな日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をからかつて遊びました。

「ベゴさん。今日は。今日は。おなかの痛いのは、なほつたかい。」

「ありがたう。僕は、おなかが痛くなかつたよ。」とベゴ石は、霧の中でしづかに云ひました。

「アアハハハハ。アアハハハハハハ。」稜のある石は、みんな一度に笑ひました。

「ベゴさん。こんちは。ゆふべは、ふくろふがお前さんに、たうがらしを持って来てやったかい。」

「いゝや。ふくろふは、昨夜、こつちへ来なかつたやうだよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」稜のある石は、もう大笑ひです。

「ベゴさん。今日は。昨日の夕方、霧の中で、野馬がお前さんに小便をかけたらう。気の毒だったね。」

「ありがたう。おかげで、そんな目には、あはなかつたよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」みんな大笑ひです。

「ベゴさん。今日は。今度新しい法律が出てね、まるいものや、まるいやうなものは、みんな卵のやうに、パチンと割つてしまふさうだよ。お前さんも早く逃げたらどうだい。」

「ありがたう。僕は、まんまる大将のお日さんと一しよに、パチンと割られるよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。どうも馬鹿で手がつけられない。」

丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射し、青ぞらがいつぱいにあらはれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考へはじめました。そこでベゴ石も、しづかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。

その次の日、又、霧がかゝりましたので、稜石どもは、又ベゴ石をからかひはじめました。実は、たゞからかつたつもりだけでした。

「ベゴさん。おれたちは、みんな、稜がしつかりしてゐるのに、お前さんばかり、なぜそんなにくるくるしてるだらうね。一緒に噴火のとき、落ちて来たのにね。」

「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまはったからね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼって、一寸ちよつととまった時も、それから落ちて来るときも、いつも、じつとしてゐたのに、お前さんだけは、なぜそんなに、くるくるまはつたらうね。」

その癖、こいつらは、噴火で碎けて、まっくろな煙と一緒に、空へのぼった時は、みんな気絶してゐたのです。

「さあ、僕は一向まはらうとも思はなかつたが、ひとりでからだがまはって仕方なかつたよ。」

「ははあ、何かこはいことがあると、ひとりでからだがふるふるからね。お前さんも、こ

とによつたら、臆おくびやう病のためかも知れないよ。」

「さうだ。臆病のためだったかも知れないね。じつさい、あの時の、音や光は大へんだつたからね。」

「さうだらう。やつぱり、臆病のためだらう。ハツハハハハツハ、ハハハハハ。」
 稜かどのある石は、一しよに大声でわらひました。その時、霧がはれましたので、角かどのある石は、空を向いて、てんでに勝手なことを考へはじめました。

ベゴ石も、だまつて、柏かしはの葉のひらめきをながめました。

それから何べんも、雪がふつたり、草が生えたりしました。かしはは、何べんも古い葉を落して、新しい葉をつけました。

ある日、かしはが云ひました。

「ベゴさん。僕とあなたが、お隣りになつてから、もうずゐぶん久しいもんですね。」

「えゝ。さうです。あなたは、ずゐぶん大きくなりましたね。」

「いゝえ。しかし僕なんか、前はまるで小さくて、あなたのことを、黒い途方もない山だと思つてゐたんです。」

「はあ、さうでせうね。今はあなたは、もう僕の五倍もせいが高いでせう。」

「さう云へばまあさうですね。」

かしはは、すっかり、うぬぼれて、枝をピクピクさせました。

はじめは仲間の石どもだけでしたがあんまりベゴ石が気がいゝのでだんだんみんな馬鹿にし出しました。をみなへしが、斯^かう云ひました。

「ベゴさん。僕は、たうとう、黄金^{きん}のかんむりをかぶりましたよ。」

「おめでたう。をみなへしさん。」

「あなたは、いつ、かぶるのですか。」

「さあ、まあ私はかぶりませんね。」

「さうですか。お気の毒ですね。しかし。いや。はてな。あなたも、もうかんむりをかぶつてゐるではありませんか。」

をみなへしは、ベゴ石の上に、このごろ生えた小さな苔^{こけ}を見て、云ひました。

ベゴ石は笑つて、

「いやこれは苔ですよ。」

「さうですか。あんまり見ばえがしませんね。」

それから十日ばかりたちました。をみなへしはびっくりしたやうに叫びました。

「ベゴさん。たうとう、あなたも、かんむりをかぶりましたよ。つまり、あなたの上の苔

がみな赤づきんをかぶりしました。おめでたう。」

ベゴ石は、にが笑ひをしながら、なにげなく云ひました。

「ありがたう。しかしその赤頭あかづきん巾は、苔のかんむりでせう。私ではありません。私の冠は、今に野原いちめん、銀色にやつて来ます。」

このことばが、もうをみなへしのきもを、つぶしてしまひました。

「それは雪でせう。大へんだ。大へんだ。」

ベゴ石も気がついて、おどろいてをみなへしをなぐさめました。

「をみなへしさん。ごめんなさい。雪が来て、あなたはいやでせうが、毎年のことで仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きつとすぐ又いらっしやい。」

をみなへしは、もう、へんじをしませんでした。又その次の日のことでした。蚊びきが一疋くうんくうんとうなつてやつて来ました。

「どうも、この野原には、むだなものが沢山あつていかな。たとへば、このベゴ石のやうなものだ。ベゴ石のごときは、何のやくにもたゝない。むぐらのやうにつちをほつて、空気をしんせんにするといふこともしない。草つばのやうに露をきらめかして、われわれの目の病をなほすといふこともない。くううん。くううん。」と云ひながら、又向ふへ飛

んで行きました。

ベゴ石の上の苔は、前からいろいろ悪口を聞いてゐましたが、ことに、今の蚊の悪口を聞いて、いよいよベゴ石を、馬鹿にしはじめました。

そして、赤い小さな頭巾をかぶったまゝ、踊りはじめました。

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

あめがふつても黒助、どんどん、

日が照つても、黒助どんどん。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

千年たつても、黒助どんどん、

万年たつても、黒助どんどん。」

ベゴ石は笑ひながら、

「うまいよ。なかなかうまいよ。しかしその歌は、僕がかまはないけれど、お前たちには、

よくないことになるかも知れないよ。僕が一つ作ってやらう。これからは、そつちをおやり。ね、そら、

お空。お空。お空のちゝは、

つめたい雨の ザアザザ、

かしはのしづくトンテントン、

まつしろきりのポツシャントン。

お空。お空。お空のひかり、

おてんとさまは、カンカンカン、

月のあかりは、ツンツンツン、

ほしのひかりの、ピツカリコ。」

「そんなものだめだ。面白くもなんともないや。」

「さうか。僕は、こんなこと、まづいからね。」

ベゴ石は、しづかに口をつぐみました。

そこで、野原中のものは、みんな口をそろへて、ベゴ石をあざけりました。

「なんだ。あんな、ちつぽけな赤頭巾あかづきんに、ベゴ石め、へこまされてるんだ。もうおいら

は、あいつとは絶交だ。みつともない。黒助め。黒助、どんどん。ベゴどんどん。」

その時、向ふから、眼めがねをかけた、せいの高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピカする器械をもつて、野原をよこぎつて来ました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云ひました。

「あ、あつた、あつた。すてきだ。実にいゝ標本だね。火山弾の典型だ。こんなととのつたのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしてることね。もうこれだだけでも今度の旅行は沢山だよ。」

「うん。実によくとのつてるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだつてないぜ。」
みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまはつてさすつたりなでたりしました。

「どこの標本でも、この帯の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやった時のぐあひ合あひが、実によくわかるぢやないか。すてき、すてき。今日すぐ持つて行かう。」

みんなは、又、向ふの方へ行きました。稜かどのある石は、だまつたため息ばかりついています。そして気のいゝ火山弾は、だまつてわらつて居をりました。

ひるすぎ、野原の向ふから、又キラキラめがねや器械が光つて、さっきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやつて参りました。

そして、柏かしはの木の下にとまりました。

「さあ、大切な標本だから、こはさないやうにして呉くれ給へ。よく包んで呉くれ給へ。苔こけなにかむしつてしまはう。」

苔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁わらや、むしろに包まれながら、云ひました。

「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたつて下さい。私の行くところは、このやうに明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん。」

「東京帝国大学校地質学教室行、」と書いた大きな札がつけられました。

そして、みんなは、「よいしょ。よいしょ。」と云ひながら包みを、荷馬車へのせました。

「さあ、よし、行かう。」

馬はプルルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向ふの野原の方へ、歩き出しました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年11月10日作成

2008年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

気のいい火山弾

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>